

『父の終焉日記』の人物構想（補遺）

黄 色 瑞 華

うことになろう。

一茶は『父の終焉日記』において、父を仏の教えにたがわず、一心に弥陀に帰命する人物として登場させ、「医師にかく見はなざるゝ上ハ、秘法仏力をかり諸天應護のあはれミを乞ふと思ふ」が、父は「宗法なりとてゆるさず。」「只手を空うして、最期を待より外ハなかりけり。」とその態を叙した。

親鸞は、『教行信証』の「化身土巻」で『般若三昧経』を引いて、「自帰ニ命仏、帰ニ命法、帰ニ命比丘僧。不レ得レ事ニ余道、不レ得レ拜ニ於天、不レ得レ祠ニ鬼神、不レ得レ視ニ吉良日。」といい、『高僧和讃』の「善導讚」で、「仏号ムネト修スレドモ／現世ヲイノル行者ヲバ／コレモ雑修トナヅケテゾ／千中無一トキラハルル」と歌って、念仏を唱うるほどの身になっても、現世の福利を乞い求める者は、自力の行者と同じく、千人中の一人も浄土往生はかなわないと誠めている。それは念仏の心が不純で、凡夫としての自覚が徹底していないからだ、とい

蓮如も、その『御文』（御文章）で「タゞ在家止住ノヤカラハ、一向ニモロ／＼ノ雑修ノワロキ執心ヲステ、弥陀如来ノ悲願ニ帰シ、一心ニウタガヒナクタノムココロノ一念ヲコルトキ、スミヤカニ弥陀如来光明ヲハナチテ、ソノヒトヲ撰取シタマフナリ。」（寛正二年）、「凡、親鸞聖人ノ御勸化ノ一義ノコ、ロハ、一念発起平生業成トタテ、モロ／＼ノ雑行ヲモ雑修ノコ、ロヲモナゲステ、一心一向ニ弥陀如来ヲタノミタテマツルコ、ロノ余念ナキカタヲ、信心発得ノ行者トイヘリ。」（文正元年）などとくりかえし、「雑行」「雑修」を誡めている。

私はすでに『おらが春』第二十一話と『教行信証』、『父の終焉日記』の人物構想^(注2)などによって一茶の思想的背景を探ってきた。本稿においては、蓮如の『御文』に視点を置いて前稿、『父の終焉日記』の人物構想^(注1)を補強しておきたい。

『御文』（おふみ）は、『消息』『御文章』『宝章』『勸章』『勸文』『御書』などとも称せられ、今日、本願寺派（西）では『御文章』、大谷派（東）では『御文』と称している。これらのなかで『御文』の呼び名が最も

古く、『蓮如上人御一代聞書』や『空善記』『栄玄記』にもその名がみえる。

『御文』は、蓮如が坊主・門徒に書きあてた文、の意で、五帖一部八十通の「帖内御文」と「夏の御文」と称せられる四通、「御俗姓」と称せられる一通の合計八十五通が、蓮如自身によって撰せられたものといわれ、他に撰にもれた「帖外御文」と称せられるものもある。

『空善記』に、「誠に経論の肝文、祖師の金言を選出させたまひたれば、末世の愚鈍の衆生この御詞により信心決定の人数いできたり、その数を知らず、ありがたき御勸化とぞおぼえはべる。」とあるごとく、中絶の観さえあった親鸞教学の中興はこの『御文』を省いては論じえないのである。今日、蓮如書写本として伝えられているものに『教行信証』『愚禿鈔』『正像末和讃』『真宗用意』『持名鈔』『最要鈔』『歎徳文』『三経往生文類』『出入二門偈』『浄土文類聚鈔』『願願鈔』『執持鈔』『諸要文集愚要記』『安心決定鈔』『教行信証名義』『正信偈註』『口伝鈔』『歎異抄』『浄土真要鈔』などがあり（佐々木芳雄『蓮如上人伝の研究』）、御文成立の背景が推察される。

二

享和元年四月二十三日、父・弥五兵衛は悪性の傷寒に罹って病臥。

二十八日の章段には父は「祖師の忌日なり迎、朝とく嗽きなどし給ふに、熱のさへりにもやならんと止むれども、一向にとどまり給はず。

御仏にむかひ、常のごとく看経し給ふに、御声低う聞ゆる、いかおとろへ給ふ後姿、心細くおぼゆ。^(注3)とある。「祖師の忌日」はいうまでもなく親鸞の命日（正忌は十一月二十八日）で、真宗では毎月二十八日に、月忌をいとなむのである。また「常のごとく看経なし給ふに」の「看経」は、「正信偈」を読み、念仏を唱えることである。『教行信証』の「顕浄土真実行文類」（行巻）に、

「安樂集」云、十念相統者、是聖者、一、数之名耳、即能積念^ニ、凝^ニ、思^ニ、不^ニ、縁^ニ、他事^ニ、使^ニ、業道成弁^ニ、便^ニ、罷^ニ、亦^ニ、不^ニ、勞^ニ、記^ニ、之^ニ、頭数^ニ也。^(注4)

又云、若久行念多、依此、始行人念者、記数亦好、此亦依^ル、聖教^ニ。

と、ある。「十念相統」（十回念仏を続けること）ということは、阿弥陀仏の本願力を念ずるといふ行為の完成をあらわしたもので、ひたすらに称名念仏を積み重ね雑念にかかわらなければ、「業道成弁」（その行為は完成）される。凡夫にあっては、十回という数に拘泥しなければならぬ、とあり、また、

次言^ニ、欲生^ニ者則、是、如来招^ニ、喚^ニ、諸有群生^ニ之勅命、即以^ニ、真実^ニ、信樂^ニ、為^ニ、欲生^ニ、体^ニ也。誠、是非^ニ、大小凡聖定散自力之回向^ニ、

故名^ニ不^ル回^ト向^ト也。然^ニ微^ニ塵^界、有^情、流^ニ転^シ煩^悩海^ニ、灑^レ没^シ生^死海^ニ、无^ニ真^實、回^向心^ニ、无^シ清^淨、回^向心^ニ、是^レ故^ニ如^來矜^哀、一^切苦^惱、群^生海^ニ、行^ニ菩^薩、行^ニ時^三業^ノ、所^修乃^至一^念一^利那[・]回^向心^ヲ為^ス首^ト、得^ニ成^ニ就^ト、大^悲心^ニ、故^ニ以^テ利^他真^實欲^シ生^心、廻^ニ施^ス諸^有海^ニ、欲^生即^是廻^向心^{ナリ}、斯^レ則^チ大^悲心^{ナルカ}、故^ニ疑^蓋无^ニ雜^ト。

と、ある。『正信偈』を読み、念仏を唱えるのは、欣求浄土の念があるからだ、それを「欲生」という。「欲生」は、「如来諸有の群生を招喚したまふの勅命」である。如来は衆生を喚び、衆生もまた如来の名を呼ぶ（称名する）、というのである。「信衆」が働いて「欲生」となり、それによって衆生をして称名せしめるのである。それは、「誠に是れ大小凡聖定散自力の回向に非ず」すべて如来の招喚による。だから衆生の側からは「不廻向と名くる」のである。だが、衆生は「微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して」何を求めてよいかわからない。「真実の廻向心」＝欣求浄土の心もなく、おのれの力とおのれの社会に執着し拘束されている。そのために如来は「大悲心」を成就されたのだった。「大悲心」を成就された如来は、一切の衆生に対してひたすらに招喚される。「欲生は即ち是れ廻向心」であり、その本体は「大悲心」である、というのである。

『父の終焉日記』の登場人物『仏説無量寿経』の経文を背景に性格化された。『父の終焉日記』の創作に、遺産分配についての文書的証拠という意図があったとすれば、また、それが正当であるためには、

遺言者たる父の生き方そのものが正当でなければならぬ。ついで、証言者たる作者自身の言動に非があつてはならない。

タゞ在家止住ノヤカラハ、一向ニモロ／＼ノ雜行雜修ノワロキ執心ヲステ、弥陀如来ノ悲願ニ帰シ、一心ニウタガヒナクタノムココロノ一念ヲコルトキ、シミヤカニ弥陀如来光明ヲハナチテ、ソノヒトヲ撰取シタマフナリ。コレスナハチ、仏ノカタヨリタスケマシマスコ、ロナリ。マタコレ、信心ヲ如来ヨリアタヘタマフトイフモ、コノコ、ロナリ。（『御文』寛正二年^{（注5）}）

カ、ルアサマシキ罪業ニノミ朝夕マドヒスルワレラゴトキノイタヅラモノヲタスケントチカヒマシマス弥陀如来ノ本願ニテマシマスゾト、フカク信ジテ、一心ニフタゴ、ロナク弥陀一仏ノ悲願ニスガリテ、タスケマシマセトオモフコ、ロノ一念ノ信マコトナレバ、カナラズ如来ノ御タスケニアヅカルモノナリ。（文明三年十二月十八日）

領解候分、委細ウケタマハルベク候トマウストコロニ、オホセ候ヤウハ、モロ／＼ノ雜行ヲステ、一向一心ニ弥陀ニ帰スルガ、スナハチ信心トコソ存ジオキ候ヘト、マウサレケリ。（文明五年二月一日）

開山親鸞聖人ノス、メマシマストコロノ弥陀如来ノ他力真實信心トイフハ、モロ／＼ノ雜行ラステ、專修專念一向一心ニ弥陀ニ歸命スルヲモテ、本願ヲ信樂スル体トス。サレバ先達ヨリウケタマハリツタヘシガゴトク、弥陀如来ノ真實信心ヲバ、イクタビモ他力ヨリサツケラル、トコロノ仏智ノ不思議ナリトコ、ロエテ一念ヲモテバ往生治定ノ時剋トサダメテ、ソノトキノイノチノブレバ、自然ト多念ニヲヨブ道理ナリ。コレニヨリテ、平生ノトキ一念往生治定ノウヘノ、仏恩報尽ノ多念ノ弥名トナラフトコロナリ。シカレバ、祖師聖人御相伝一流ノ肝要ハ、タゞコノ信心ヒトツニカギレリ、コレヲシラザルモノヲ他門トシ、コレヲシレルヲモテ真宗ノシルシトス。(文明六年正月十一日)

当流親鸞聖人のヲシヘタマヘルトコロノ他力信心ノヲモムキトイフハ、ナニノヤウモナク、ワガ身ハアサマシキツミフカキ身ゾトオモヒテ、弥陀如来ヲ一心一向ニタノミタテマツリテ、モロノ／＼雜行ラステ、專修專念ナレバ、カナラズ遍照ノ光明ノナカニオサメトラレマイラスナリ。コレマコトニワレラガ往生ノ決定スルsgタナリ。コノウヘニナラコ、ロウベキヤウハ、一心一向ニ弥陀ニ歸命スル一念ノ信心ニヨリテ、ハヤ往生治定ノウヘニハ行住座臥ニクチニマウサントコロノ弥名ハ、弥陀如来ノワレラガ往生ヲヤスクサダメタマヘル大悲ノ御恩ヲ報尽ノ念仏ナリトコ、ロウベキナリ。(文明六年三月中旬)

在家無智ノミノウヘニヲヒテハ、ナニノワヅラヒモナク、タゞモロ／＼ノ雜行ラステ、一心ニ阿弥陀如来ヲタノミタテマツリテ、後生タスケタマヘトフカク弥陀ヲ一念ニタノミマヒラセンヒトハ、タトヘバ十人モ百人モミナコト／＼ク淨土ニ往生スベキコトハ、サラニウタガヒアルベカラズ。コノイハレヲヨクコ、ロエタルヒトヲ、他力ノ信心ヲ獲得シタル当流ノ念仏ノ行者トイフベシ。カクノゴトク真實ニ決定セシメタルヒトノウヘニハ、ネテモサメテモ、仏恩報謝ノタメニ弥名念仏マフスベシ。(明応六年十月十五日)

ソレ当流聖人ノ御勸化ノ安心トイフハ、アナガチニ罪障ノ輕重ライハズ、タゞ一念ニ弥陀如来後生タスケタマヘト歸命セシヤカラハ、一人トシテモ報土往生ヲトゲズトイフコトアルベカラズト各々コ、ロウベシ。此ホカニハ更ニ別ノ子細アルベカラズトオモフベキモノナリ、(明應六年十一月二十五日)

抑、十惡五逆トイフツミフカキ人モ、又五障三從ノ女モ、万事ヲナゲステ、一心ニ弥陀如来コノタビノ後生タスケ給ヘト、ヒシトタノマン人ハ、十人モ百人モミナトモニ極樂世界ニ往生スベキ事、サラニウタガフ心ツユホドモアルベカラズ。(明應七年十月二十八日)

タビフタゴ、ロナク、一向ニ阿弥陀仏バカリヲタノミマイラセテ、後生タスケタマヘトオモフコ、ロヒトツニテ、ヤスクホトケニナルベキナリ。コノコ、ロノツユチリホドモウタガヒナケレバカナラズ極楽ヘマイリテ、ウツクシキホトケトナルベキナリ。

(成立年代不詳)

いま、『御文』の中から蓮如がいう親鸞教徒の心得べきものを抜いてみた。親鸞教学の根本である『仏説無量寿経』の第十八願(衆生往生の因果を誓った部分)に、「設我得_レ仏、十方衆生、至心信樂、欲_レ生_三我國_一、乃至十念、若不_レ生者、不_レ取_三正覺_二。唯除_三五逆、誹謗_三正法_一。」と、ある。すなわち、法蔵は世自在王に対する四十八の誓願中、その十八で、「もし、私が仏になることができたら、十方世界の衆生が至心に信樂して(至誠心をもって疑いなく信じ願って)私の浄土に生まれたいと、念仏する者には必ずそれを果せます。それがかなわなければ、私は仏になりません。ただし、父母・阿羅漢を殺し、衆僧の和合を破り仏身を傷つける罪と、仏の教えをそしめる者はその限りではありません。」といい、それが成就して法蔵は弥陀となったのである。これを「本願」あるいは「弥陀(如来)の本願」という。

『父の終焉日記』における父は、「一向ニモロノノ雜行雜修ノワロキ執心ヲステ、弥陀如来の悲願(筆者注・本願)に帰し」病臥した後も「常のごとく看經」をおこたらない。『蓮如上人御一代聞書』に、

ノタマハク、「朝夕、正信偈和讃ニテ念仏申スハ、往生ノタネニナルベキカ、ナルマジキカ」ト、ヲノノ坊主ニ御尋ネアリ。ミナ申サレケルハ、「往生ノタネニナルベシト申シ」タル人モアリ、「往生ノタネニハナルマジキ」ト言フ人モアリケルトキ、仰ニ、「イヅレモ悪シ。正信偈和讃ハ、衆生ノ弥陀如来ヲ一念ニタノミマイラセテ、後生タスカリマウセトノコトハリヲアソバサレタリ。ヨク聞分ケテ信ヲトリテ、アリガタヤノト、聖人ノ御前ニテヨロコブコトナリ」ト、クレノ仰候ナリ。

「南無阿弥陀仏ノ六字ヲ、他宗ニハ大善大功德ニテアルアヒダ唱ヘテコノ功德ヲ諸仏菩薩・諸天ニマイラセテ、ソノ功德ヲワガモノガホニスルナリ。一流ニハサナシ。コノ六字ノ名号、ワガモノニテアリテコソ、唱ヘテ仏菩薩ニマイラスベケレ。一念一心ニ後生タスケタマヘトタノメバ、ヤガテ御タスケニアヅカルコトノアリガタサノト申スバカリナリ。」ト仰候ナリ。

と、ある。先述のごとく「信樂」が働いて「欲生」となり、それによって衆生をして称名念仏せしめんとする。それはすべて如来の招喚による、というのだから畢竟、「アリガタサノ」という心を表すことになる。

されば、『父の終焉日記』の父が、称名念仏のうちにその最期を迎えたのは、如来の招喚の声を内感してのことであって、それは親鸞教

徒としての安心決定の態を示すものである。『御文』に、

サレバ往生極樂ノ安心ト申スハ、タゞ南無阿弥陀仏ノ六ツノ字
ノコ、ロヲヨクシリワケタルヲモテ、スナワチ信心ノスガタトハ
申スナリ。マヅ南無トイフ二字ハ、衆生ノ阿弥陀仏ニムカヒマヒ
ラセテ、後生タスケ給ヘト申ス心ナリ。サテ又阿弥陀トマウス四
ノ字ノコ、ロハ、南無トタノム衆生ヲ、阿弥陀如来ノアハレミマ
シ／＼テ、アマネキ光明ノナカニ、オサメヲキタマフコ、ロヲ、
スナハチ阿弥陀仏トハマウスナリ。マコトニ浄土ニ往生シ、ホト
ケニナラントオモハンヒトハ、一向ニ阿弥陀仏ニ帰命シテ、タス
ケタマヘトオモフコ、ロノ一念ヲコルトキ、往生ハサダマルゾト
ナリ。(中略)サレバ、信心サダマリテノウヘノ念仏ヲバ、弥陀如
来ノワレヲタヤスクタスケマシ／＼ツル、ソノ御アリガタキ御
ウレシサノ、御恩ヲ報ジマヒラスル念仏ニテアルベシトオモフベ
キモノナリ。(文明七年五月二十七日)

と、あり、『御一代聞書』にも、

ソノ、チ念仏申スハ、御助ケアリタルアリガタサ／＼ト思フ心
ヲ喜ビテ、南無阿弥陀仏／＼ト申バカリナリ。サレバ他力トハ、
他ノ力トイフコトナリ。コノ一念、臨終マデトホリテ往生スルナ
リ。ト仰セサフラフナリ。

と、ある。

「この信をエタルクラキヲ、経(筆者注・『仏説無量寿経』)ニハ、『即
得往生、住不退転』トトキ、釈(筆者注・曇鸞注解『往生論註』)ニハ、
『一念発起、入正定之聚』トモ」(『御文』文明三年七月十八日)いう。
『父の終焉日記』における父は、臨終を待たず、「即得往生、住不退
転」の位につき、死後の浄土往生は疑いなかった、ということになる
う。

五月三日、作者は医師に見はなされた父の命を心配して「秘法仏力
を借り、諸天応護のあはれミを乞ふと思ふ」が、父は「宗法なり」と
いって許るさなかつた。『御文』に、

モロ／＼の雑行(筆者注・正行以外の行業を修して、浄土往生を願
うこと)ヲ修スル心ヲステ、又諸神・諸仏ニ追従マウス心ヲモミ
ナウチステ。(中略)フカク如来ニ帰入スル心ヲモツベシ。(文
明五年十二月八日)

とあるごとく、また、「フカク信ジテ、一心ニフタゴ、ロナク弥陀一
仏ノ悲願ニスガリテ」(文明三年十二月十八日)・「イマハノトキノ衆生ニ
ヲヒテハ、弥陀ヲタノミ信心決定シテ、念仏ヲマウシ極樂ニ往生スベ
キ身トナリナバ、一切ノ神明ハカヘリテワガ本懐トオボシメンテ、ヨ
ロコビタマヒテ、念仏ノ行者ヲ守護シタマフベキアヒダ、トリワキ神
ヲアガメドモ、タゞ弥陀一仏ヲタノムウチニミナコモレルガユヘニ、

別シテタノマザレドモ、信ズルイハレノアルガユヘナリ。」「諸仏菩薩トマウスコトハ、ソレ弥陀如来ノ分身ナレバ、十方諸仏ノタメニハ本師本仏ナルガユヘニ、阿弥陀一仏ニ歸シタテマツレバ、スナハチ諸仏菩薩ニ歸スルイハレアルガユヘニ、阿弥陀一体ノウチニ諸仏菩薩ハミナコトノクコモレルナリ。」(文明六年正月十一日)の理をもつてすれば当然のことであった。

五月十五日、「床つき給ふ日より、朝夕の看経怠る時なくつとめ給ふに、今はおきふしもま、ならず、床にありながら、ともしびの影ほのかに、称名となへ給ふ声の常に替りて聞ゆるこそ、何となく心ほそけれ。」と、ある。「称名となへ給ふ声の常に替りて、それは「不退転」の位に住し、すでに父の往生は決定したからであろう。その変は「弥陀たのむすべもしらで、うか／＼月日を費す」(『おらが春』第十二話)作者にもしかとうかがわれるのだったが、「何となく心ほそけれ」としか思われなかった。

さて、五月十九日、「父うるハしく目をあき給ひ、い、い、いなん。連れて歩め。と云る。いづくへバし行給ふらん。と問ひければいふにやをよぶ、至心々^(信樂)経欲生我國、と病なき時の声のごとくたからかになへ給ふ。」「後におもへば、是ぞ物の「の」給ひ終、おもへば辞世にてありし也。」と、いう。『仏説無量寿経』法蔵の第十九願に、

設我得^レ仏、十方衆生、發^レ菩提心、修^レ諸功德、至心發^レ願、欲^レ生^ニ我國、臨^ニ壽終時、假令下^下与^三大衆圍繞、現^其其人前^上者、不^レ

取^ニ正覺^一。

すなわち、十方世界の衆生は菩提心をおこし、功德を積み、それを廻向して、浄土に生れたいと至心をもつて願うでしょう。そういう者の臨終に、私は大衆にかこまれて、その人の前にあらわれ、浄土に迎えます。それがかなわなければ私は仏になりません、とある。それが成就されて法蔵菩薩は如来となったのだから、『父の終焉日記』の父の臨終に際して「大衆」にかこまれた如来の来迎があったのだ。『御文』には、

問テイハク、一念往生発起ノ義、クハシクコ、ロエラレタリ。
シカレドモ不来迎ノ義イマダ分別セズサフラフ。ネンゴロニシメ
シウケタマハルベク候。

答テイハク、不来迎ノコトモ、一念発起任正定聚(筆者注・如来の招喚の声を内感して、念仏を称える者は、命が終った時、必ず浄土に往生して仏になることが定まること)ト沙汰セラレサフラフトキハ、
サラニ来迎ヲ期シサフラフベキコトモナキナリ。ソノユヘハ来迎
ヲ期スルナンドマウスコトハ、諸行ノ機(筆者注・自力の往生を願
う者)ニトリテノコトナリ。眞実信心ノ行者ハ、一念発起スルト
コロニテ、ヤガテ攝取不捨ノ光益ニアヅカルトキハ、来迎マデモ
ナキナリトシラル、ナリ。(文明四年十一月二十七日)

と、あって、さらにこれに続いて「サレバ聖人ノオホセニハ、来迎ハ諸行往生ニアリ、眞実信心ノ行人ハ、撰取不捨ノユヘニ正定聚ニ住ス正定聚ニ住スルガユヘニ、カナラズ滅土（筆者注・涅槃）ニイタル、カルガユヘニ、臨終マツコトナシ、来迎タノムコトナシトイヘリ。」とある。

『父の終焉日記』で、定心決定の父を『仏説無量寿経』の第十九願にある、法蔵の誓願に思いを寄せて（五月十九日の最期）叙した作者は、後に『おらが春』の巻頭に、『沙石集』の「迎講事」の説話を用意した。だが、それは、「それとはいさゝか替りて、おのれらハ俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝ししも、厄払ひの口上めきてそらくしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家ハ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形うに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。」と結んである。『御文』にいうごとく、親鸞教徒にあっては、他力の信心を得る一念で、ただちに浄土往生は決定し、臨終を待つことなく「正定聚」の位に身を置くことができるとのだから、「臨終マツコトナシ、来迎タノムコトナシ」なのだ。「平生業成」（一念発起往生正定聚・即得往生不退転ともいう）の信を深めていく作者の宗教的境涯をかいま見ることができるのである。

三

『父の終焉日記』の人物、すなわち父・継母・異母弟、そして作者自身の四人の登場人物の性格化には『仏説無量寿経』の世界が色濃く映っている。門徒（親鸞教徒）が、宗僧より受ける説教の中心は『仏説無量寿経』である。親鸞教学の根本がそこにあるからだ。また、門徒の仏壇に必ず備えてあって、宗僧が勸行の最後に拝読するのが『御文』である。『正信偈』は、僧俗を問わずもともともよく読誦され、ついで『仏説阿弥陀経』がよく読まれる。だが、もともとも熟知するところは、『仏説無量寿経』その第十八願の世界であり、『御文』のことばの数々なのだ。一茶もまた、『御文』によく耳を傾け『おらが春』第二十一話は、その形式・使用語彙などに明瞭に傾倒のあとが見える。

注

- (1) 「紀要」（昭和学院短大）第8号所収。
- (2) 「解釈」（解釈学会）第二七二号所収。
- (3) 以下『父の終焉日記』本文は、古典俳文学大系本による。
- (4) 以下『教行信証』の本文は、定本親鸞聖人全集本による。
- (5) 以下『御文』の本文は、日本思想大系本による。
- (6) 以下『仏説無量寿経』の本文は、大正新修大蔵経本による。
- (7) 以下『蓮如上人御一代問書』は、日本思想大系本による。